



近衛歩兵第四連隊正門



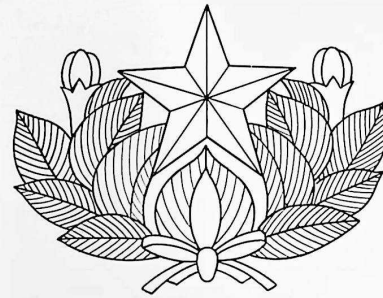
中隊内務班



キャップサンジャクの兵営



山岳演習



近衛兵の帽章



近衛歩兵第四連隊軍旗



銀輪部隊

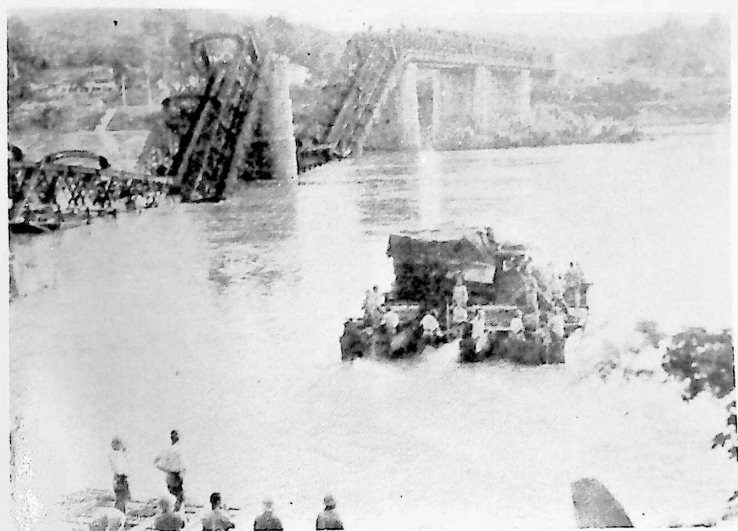


中山県石岐の兵営

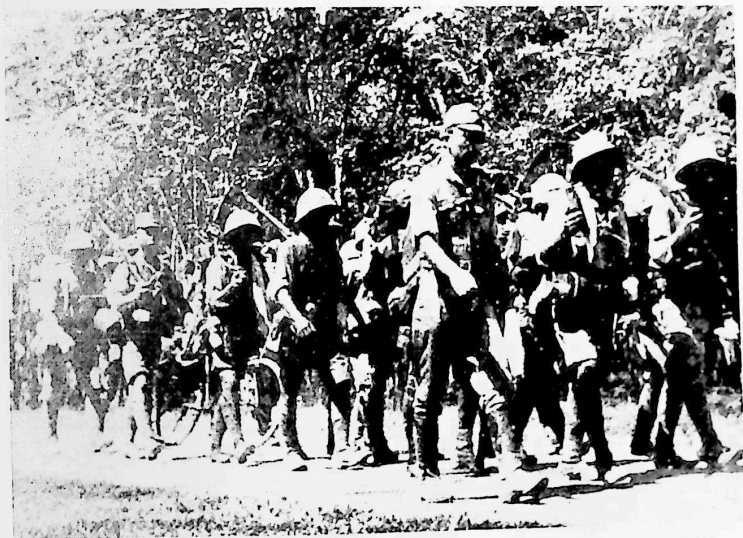
初年兵	近衛歩兵第四聯隊入營
内務班 22	入營の朝 16
訓練 28	入隊星一つ 19
面会・酒保 32	
外出・營倉 35	
近衛兵の名誉 40	

目次

まえがき 7
徴兵検査
甲種合格 11
入隊の心得? 14



爆破されたペラク川と工兵の活躍



歩兵部隊の進撃

出陣 42

南支那駐留

戦地の内務班 49

初年兵の郷愁 51

初年兵係K兵長の死 53

討伐に初参加 57

幹部候補生 59

仏領インドシナに進駐

大輸送船団 62

候補生合格発表 64

南部仏印無血上陸 65

自転車部隊の創設 68

進級・ジャングルの訓練 70

練兵休 71

水泳指導班長を命ぜられる 82

快適なスコールと皮膚病 84

兵隊と銃後のきずな 86

伍長に進級 92

休日外出 94

特別志願兵の募集 95

太平洋戦争の勃発

部隊の移動 98

開戦 101

マレー国境へ 106

銀輪部隊の進撃 110

アロルスターの事件 115

再び戦場に 126

チャーチル給与 128

クアランプール 132

原隊復帰 138

シヨホール近くの戦闘

白兵戦 147

我が中隊孤立する 158

パイナップル畑 163

最前線の混乱 165

シヨホール王宮 171

総 攻 撃

敵前渡河前夜 174

敵前渡河 177

マンガロープの林 180

敵戦車と遭遇 192

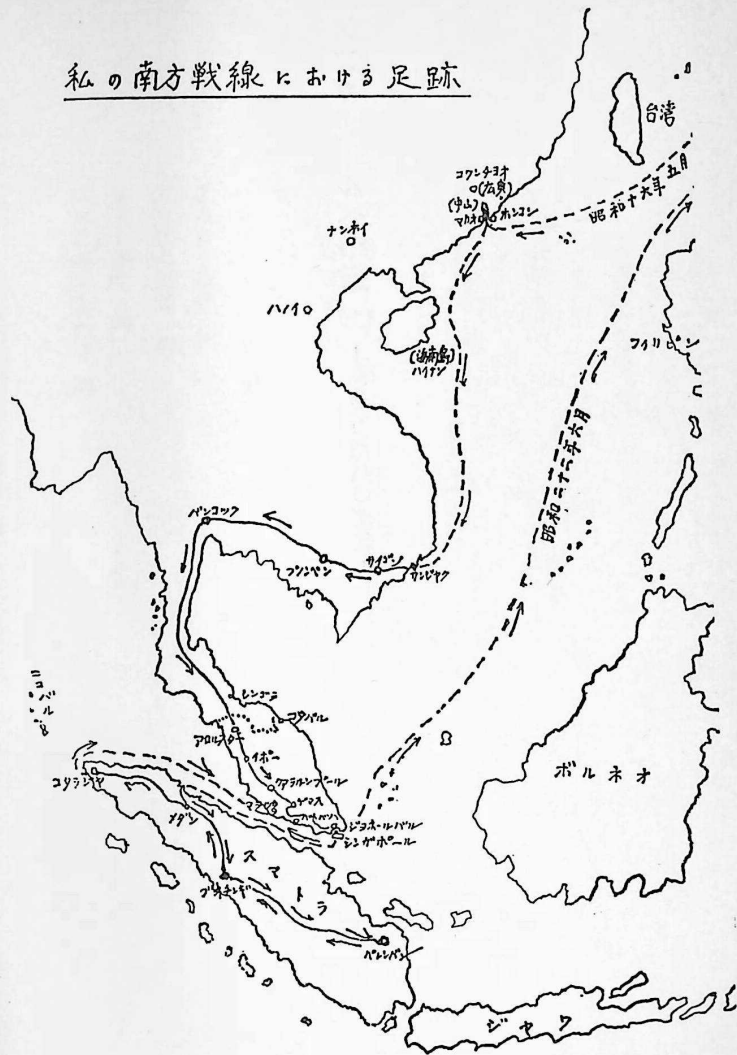
用水堀の死闘 205

戦友を焼く 211

シंगाポール陥落 216

シंगाポールへの道(上) —ある近衛兵の記録—

私の南方戦線における足跡



まえがき

アセアン (ASEAN) 東南アジア諸国連合、最近とみに世界の先進国の関心が高まりつつある。特に日本にとってのアセアンは、将来の日本経済を占う重大な鍵を握っているともいわれ、歴史的に見ても、日本とは昔から深い関係がある。

太平洋戦争以前は、欧州の白色人種諸国によって、長い間植民地として搾取されてきた。アセアン諸国は日本とはそれより古く、宗教、文化、経済に繋りをもっていた。然し同じ有色東洋人でありながら、日本との今日までの関係は、必ずしも善隣友好の国際関係であったとはいえなかった。その証拠には、数年前も日本人はエコノミックアニマルと呼ばれ、エゴイズムときめつけられ、日本商品のボイコットが起きたことは、いまだ耳新しい恥ずべき苦い経験である。

私は三十数年前にアセアンの一環、南ベトナム、タイ、マレー、スマトラに、一兵士として六年間に亘り足跡を残した。私はこれらの土地において戦争とは別の意味で、心の奥

に強く焼きつけられたものがあつた。それは我々日本人はアセアン諸国の人々とは、人種的にも近い友人であり、それ以上の兄弟ではないかと印象づけられたことである。

当時の日本はこれら兄弟国であるアセアン諸国を、凄惨非道なる戦争の舞台とした。即ち、南方派遣軍としての若き兵士達は、祖国日本の為にと、ひたむきな忠誠心が、この地において死を覚悟して戦わせたのである。当時軍人としての体験者は、既に五〇歳を過ぎた人達となつた。

私は昭和一六年一月、近衛歩兵第四聯隊第一中隊の現役兵として入隊した。南支（中国南部）を始め仏印（南ベトナム）タイを経て、太平洋戦争に突入、緒戦の大戦果は、海軍の真珠湾奇襲攻撃の成功と並び称された、陸軍のマレー・シンガポール攻略作戦の戦闘に一兵士として参加した。私は入隊から感激のシンガポール陥落までの記録を上巻として結んだ。

部隊は更に、マラッカ海峡を渡り南進、スマトラ島に進攻した。軍旗は赤道を越え、南半球に歩を進めた。近衛師団はスマトラ島に三カ年の長きに亘つて駐留し、その間貴重な体験と熱帯国の珍しいことを数多く見聞した。

インド洋を望む最北端の陣地において終戦となり、その後連合軍の命令で、部隊はマレー半島に戻された。それは最早、栄光ある日本陸軍の近衛兵ではなかつた。敗戦国陸軍の捕虜の一員として、銃も無ければ剣もなかつた。丸腰姿で悲壯な覚悟をもってマレーの土を踏んだ。クアラルンプールのイギリス軍捕虜収容所へ収容されたのである。

紺碧の海の彼方、遙かなる南方戦線に、若き血潮が躍動した三十数年前の強烈な体験も、年と共にその記憶も薄らいでいく。若き兵士達は、血みどろになり、唯国に殉ずる覚悟で精魂を尽した。この体験記が戦争を知らない世代の人達に、どのように感受されるのか、私には解らない。然し兄弟国であるアセアン諸国の国土において、現実にもこのような事実のあつたことに思いを致し、善隣友好平和日本の将来の為に、些かなりとも寄与する糧となればと念じたい。

二等兵から下士官までであつた私には、大きな部隊の行動など解ろうはずがない。解るのは精々自分の中隊の行動範囲内である。師団とか聯隊というような作戦行動については、元職業軍人であつた人達の書かれた書物に委ねることにしたい。私は自身の行動のみを出来る限り忠実に辿ることに専念し、波乱に満ちた青春の記録とする。